〔西鶴織留一〕古帳よりは十八人口
ひとつ釜の加賀米にはしらかし、汁鰯菜も同じやうに居りて、主下人のへだてなければ、朔日、二十八日に膾せぬ事もあらためず、精進日には香の物にて、朝夕お主のお影と箸箱をいたゞき、〇下略

箸筒

〔節用集大全一器財〕筯筒（はしづつ）

〔折たく柴の記上〕父〇新井正齊の仰せしは、我父は〇中略つねに物めしけるに、箸筒の黒くぬりしに、かきつばたの蒔繪をゑたりしより、箸とりいで、物めしして、めし終りぬれば、箸をおさめてかたはらにさしをき給ひしを、〇下略

箸紙

〔近世御膳調進圖〕御箸一雙次紙包之

〔料理通四編〕普茶卓子略式心得
箸を牙筯といふ、箸紙に差て細き朱唐紙にてまき、福祿壽などの目出度文字をかく、

〔煎茶綺言二下〕八仙卓讌式記
牙筯　象牙ノ箸ナリ　白紙ニテ包ミ、中ヲ朱紙ニテ卷ク、箸ノ先キヲ銀ニテ張リタルモノナリ、

箸雜載

〔假名世說上〕風來山人、芳町及び南方にのみ遊びて、北里の事は不通なりしが、箸紙客の替名をゑるせば、文にはおのが本名をあらはしといへる語、山人の自讃なりき、

〔堀川後度狂歌集春一〕元日
箸紙のかみよの春や元日に祝ふぞうにも杉のにほん紀　萬榮亭龜丸

〔日本書紀五崇神〕十年九月壬子、〇中略爰倭迹迹姫命、仰見而悔之急居、急居此云二則箸撞陰而薨、乃葬於大市、故時人號二其墓一謂二箸墓一也、

〔朝野群載七攝籙家〕御齋會加供解文